

芭蕉の生き方

41期

I テーマ設定の理由

「閑さや 岩にしみ入る 蟬の声」

これは私が松尾芭蕉の俳句の中で、最もよく頭に浮かぶ句である。この俳句を読むと、情景が浮かび上がってくる。芭蕉は、どこでこの俳句を詠んだのだろうか。彼の人生のうちのいつ頃だろうか。その時どんな思いで詠んだのだろうか。さまざまな疑問がわいてくる。これらをきっかけに、芭蕉に関することを調べ、芭蕉の生き方とはどのようなものであったかを知らうと思った。

II 研究方法

[1] 「奥の細道」について

芭蕉の足跡をたどって、この旅での出来事や詠まれた俳句を調べる。

[2] 「奥の細道」以外の作品

芭蕉が書いた順に、「野ざらし紀行」「鹿島紀行」「笈の小文」「更科紀行」の説明。

[3] 芭蕉の生い立ち・性格

どこで生まれ育ったか、また旅の様子などからわかる性格をまとめる。

[4] 芭蕉にまつわる伝説や事件

「奥の細道殺人事件」という小説から伝説を調べる。

[5] 句碑を求めて

大阪市内で芭蕉の句碑がある所へ行く。

[6] まとめ

[1]～[5]から、芭蕉の生き方とはどういうものであったかをまとめ、結論とする。

III 研究内容

[1] 「奥の細道」について

「奥の細道」は、芭蕉が生涯に書き残した数多くの文学作品の中でも、最高傑作に数えられる作品である。この奥の細道の旅で、芭蕉は曾良と共に、およそ5ヶ月、2400kmにもおよぶ東北・北陸への長い道のりを歩いた。

東北・北陸への旅を題材にしたこの作品で、芭蕉が描こうと目指したもの

→各地の昔から歌によまれてきた歌枕や名所旧跡をめぐる旅を通して、永遠の命をもった真の芸術境地、風雅の世界をとらえようとした。

奥の細道足跡全図



<上の図で芭蕉の足跡をたどる>

- ① 旅立 元禄2年(1689年)の春、芭蕉と曾良は、人々と別れを告げて旅立つ。
- ② 日光 日光東照宮を参詣した芭蕉は、深い宗教的な感動に打たれる。



◀日光東照宮陽明門

- ③ 那須野 芭蕉たちは、一人の土地の少女に出会う。
=曾良の一句=

「かさねとは 八重撫子の 名なるべし」

(解説) かれんな少女の名をかさねと聞いて曾良が撫子の花を連想した。

- ④ 白河 白河の関は、奥州の三大関所の1つである。
- ⑤ 松嶋 この旅の最大目的地の1つで、芭蕉たちは、とても表現しつくせないような美しい松嶋の絶景をまのあたりにした。
- ⑥ 平泉 かつて奥州藤原氏が栄え、源頼朝の手をのがれてきた源義経のゆかりの地でもある。芭蕉は、はかない人間の営みを思いやって涙した。
- ⑦ 立石寺 =芭蕉の一句=
「閑さや 岩にしみ入る 蟬の声」
(解説) 岩にしみ入る感じのする蟬の声は、いっそう閑寂な感じを増している。
- ⑧ 象潟 現在の象潟 —— 田んぼの中に小さな丘が点在する田園地帯に過ぎない。
当時の象潟 —— あたり一面が海で、美しい島々が浮かぶ入り江だった。
- ⑨ 金澤 4か月余りも苦楽を共にした曾良と別れる。
- ⑩ 大垣 終着の地。大垣から、再び伊勢へと向かう旅の人となる。

[2] 「奥の細道」以外の作品

芭蕉は旅で暮らした間に、「野ざらし紀行」「鹿島紀行」「笈の小文」「更科紀行」「奥の細道」という順でこれらの名作を書いた。そこで、「奥の細道」を除いた4つの作品を紹介する。

□ 野ざらし紀行

◎成立したのは？

貞享二年四月の末帰庵してまもなく執筆に取りかかり、秋頃までには大体でき上がっていた。旅の間におそらくメモができていたのだろう。

*庵 … 草ぶきのそまつな仮の家

◎旅の目的と成果は？

芭蕉は悲壮な思いをいだいて旅に出た。

(理由) この旅の間に、俳諧の新風を樹立しなければ……という強い覚悟があったから。

→ 旅の成果は十分に現れ、句境が落ち着いてきて蕉風が確立した。

□ 鹿島紀行

◎成立したのは？

貞享四年八月

◎旅の目的は？

・月見をすることにあった。

・久しぶりに参禅の師である仏頂和尚に会い、旧交を深めたいという気持ちがあった。

◎文学的な価値は？

気楽な気持ちで筆をとっており、短篇のせいもあるが大へんよくまとまっている。

□ 笈の小文

◎首途の感想は？

今日から、自分は旅人と人から呼ばれていこう、と芭蕉は思った。

——「野ざらし紀行」との比較——

① 「野ざらし紀行」の首途 … 悲壮な思いをいだく。

② 「笈の小文」の首途 … 心情にゆとりがあり、旅に勇み立つ浮き浮きした気分があった。

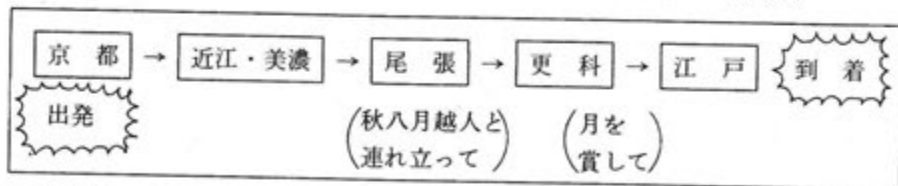
→ 風雅に対する信念が養われていたと言える。

□ 更科紀行

◎行程は？

芭蕉は次の図(図1)のように旅をした。

(図1)



◎旅の目的は？

これまでの旅とは違って、門人も知人もいない辺鄙な山間の旅行であって、次の「奥の細道」の旅の足ならしとも考えられる。

[3] 芭蕉の生い立ち・性格

◎「奥の細道」にいたるまでの芭蕉の生い立ちと人生

芭蕉の年齢	できごと
十代のすえ	天保元年(1664年)現在の三重県上野市に生まれる。 藤堂良忠に仕える。 卿吟良忠、25才の若さでこの世を去る。 芭蕉、ふるさとを離れ江戸に移る。 次第に俳諧師としての地位を築く。 隅田川のほとりに芭蕉庵をむすぶ。
44才	「鹿島紀行」の旅
44才	(44才の年から翌年にかけて)「笈の小文」の旅
45才	「更科紀行」の旅
46才	「奥の細道」の旅

◎芭蕉の性格

旅の途中で、特に心の清い人、旅を愛する人、そして、義経・平家の武士など史上にあわれをとどめた人に涙をふりそそぐ。

⇒芭蕉は ・涙もろい
・心優しい(特に弱者に対して)

といえる。

◎芭蕉の最期

「旅に病んで 夢は枯野を かけめぐる」の一句を残してこの世を去ったのは、「奥の細道」の旅の5年後、1694年の冬のことだった。

[4] 芭蕉にまつわる伝説・事件

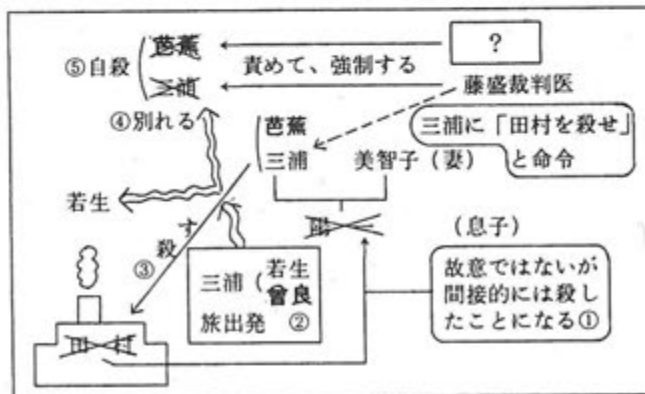
奥の細道殺人事件

小説で芭蕉に関係する「奥の細道」の殺人事件を書いた本があった。この小説は、直接芭蕉の事件を取り扱っているのではなく、三浦という東陽大学国文科の講師が、芭蕉と同じ「奥の細道」の経路をたどって旅をする。そこで事件が続発するのである。

◎著者・斎藤栄さんの言葉

「私は以前から芭蕉という人物に根強い疑惑を持ち続けてきた。偉大な俳人という名声の陰で、密命を帯びて暗躍する忍者としての“もう1人の芭蕉”を活字に定着してみたいと思った。そして今回、“1人2役”としての芭蕉の姿を浮き彫りにしてみたのが、この作品である……。」

◎この小説における人物の関係(図2)



(図2)の(注)… 太字で書いてある芭蕉と曾良が小説の人物、三浦と若生に置きかえられている。また、×印は、自殺したかあるいは殺された人につけた。

◎(図2)での主な登場人物の紹介

・三浦…芭蕉の研究をしていて、「奥の細道」の謎を解くために芭蕉と同じ経路をたどって旅に出る。主人公。
・若生…大学院の学生。三浦と共に旅にでる。

- ・美智子…三浦の妻
- ・陽一……三浦の息子
- ・田村……有毒物質を排出していた工場の責任者。
- ・藤盛裁判医…殺された人や自殺した人の解剖をする。

◎ (図2) の番号順のあらすじ

- ①陽一が川のそばで遊んでいると、田村の工場から流されてきた有毒なガスにおかされ、死んでしまった。三浦は工場長の田村を憎んだ。
- ②「奥の細道」の旅に三浦は若生と共に行き、*アリバイをつくっておいた。
- ③旅の途中でぬけ出し、若生には秘密で田村を殺した。
- ④芭蕉と曾良の様に、三浦と若生も旅の途中で別れた。
- ⑤旅を終えた後、三浦が自殺した。

*アリバイ … 刑事事件があった時、被疑者がその現場にいなかったという証明。

◎この小説の重要な点

三浦が自殺してから見つかった、三浦の「奥の細道」の研究ノートから、「三浦は強制されて自殺した」ということがわかる。そしてとり調べたところ、三浦を死に追いこんだのは藤盛裁判医だった。また彼は、三浦に「田村を殺せ」と命令していたこともわかった。さて、ここでこの小説が終わったのではない。芭蕉を三浦に置きかえていたことを忘れてはならない。もし、この小説のように、芭蕉も何者かに強制されていたら…。

◎?の人物

「芭蕉は忍者であり、彼を奥の細道の旅に立たしめた何者かがいる。また、この小説のように、何者かが芭蕉を自殺に追い付めたのだ。」という説がある。

では、何者かというのは(図2では?の人物に当たる)

〈水戸藩第二代の藩主であり、庶民には水戸黄門の名で親しまれていた — 徳川光圀である〉

名君の誉れ高い徳川光圀。実は忍者芭蕉を、「奥の細道」への旅に立たしめた張本人とは…。しかし、芭蕉の命令者が光圀だとすれば、芭蕉に関する多くの疑問が氷解するのだ。

△水戸藩と芭蕉との結びつきを想像させる事実▽

〈江戸に出た芭蕉が、関口台町の水道工事の現場監督になったこと。また、こうした公職についていた芭蕉が、いつとはなしにその仕事から離れてしまっていること。〉

⇒水戸藩の手が彼に及んだ可能性がある。

〈光圀が文教政策に力を入れたこと。〉

⇒その光圀が、俳聖と忍者の2足のわらじをはいた人物に目をつけたのは当然だ。

△光圀の命令の真意▽

当時の水戸藩 — 那珂湊港の繁栄が、藩政に大きなウエイトを持っていた。水戸にとって、水運は非常に重要で、そのカギとなったのが太平洋側の石巻港・日本海側の酒田港の2つであった。

要約すると…

芭蕉の「奥の細道」の旅の目的は、こうした重要港の実状と、それに結びつく河川利用の実体を、調査報告することにあつたのではないかと考えられる。水深を測ったり水の流れを調べ

るのは忍者の特技でもあるし、水道工事の指揮をとった芭蕉にはびつたりの命令だったのだ。これらのことは仮説で、真実はまだはっきりとしない。

[5] 句碑を求めて

芭蕉の句碑が大阪市内にあると聞いて、句碑のある所へ行ってみた。

1. 住吉公園

「升買って ▶
分別かわる
月見かな」
〈元禄7年
(1694年)の
宝の市に参
詣した時の
句〉



2. 聖天了徳院



「しら菊の 目に立てて▶
見る 塵もなし」
〈元禄7年9月29日によ
まれた句〉

◀「かきつばた 語るも
旅の ひとり哉」
〈元禄頃によまれた句〉

3. 太融寺



IV 結 論

これまで俳人松尾芭蕉について研究し、芭蕉に関することを随分知ることができた。そこで、私がこの自由研究につけた題、「芭蕉の生き方」とはどのようなものであったのかを明らかにしておきたい。芭蕉は俳諧一筋の人生を送ることに決意してから、真の俳諧を目指して貧乏を覚悟の日々を送った。彼の心の中には、金持ちの素人俳人達の御機嫌をとりむすびながら生活の糧をうる、俳諧師の生き方のむなしさへの疑問が芽生えていたのだ。そして、46才で選んだ「奥の細道」の旅こそは、ふるさとを離れ、また俳諧師としての安定した生活をも捨てて、ひたすらに真の俳諧の道を探り続けてきた芭蕉の、これまでの人生の総決算とも言える旅であったに違いない。芭蕉はこの世を旅と見なし、時時刻刻すべてが移り変わってゆく旅を通して、ゆるぎない永遠の命を持った風雅の世界を求め続けたのである。

V 反省・感想

今回の研究で、芭蕉のことについて多くの知識を増やすことができた。資料が思ったよりもたくさん手もとに集められたので良かったと思う。芭蕉の生き方をまとめると、芭蕉の思想や人生観が深く理解できたような気がする。この研究は、いつまでも心に残ることと思う。

〈参考文献〉

- ・「奥の細道」 旺文社文庫
- ・「奥の細道殺人事件」 斎藤 栄 集英社文庫
- ・「奥の細道」 世界文化社